

「差額地代第一形態」に関する一考察

—大内・日高両教授の見解の検討—

漆 原 綏

I. 序 II. 大内・日高両教授の見解 III. 検討 IV. 小見—差額地代第一形態論における「耕作序列」の意義 V. 結語

I. 序

この小論は、差額地代第一形態 (Differentialrente I) 論を理論的に展開するにあたって、いわゆる「耕作序列」をどのように位置づけたらよいかという点に問題をしばって、若干の考察を試みたものである。この問題については、周知のとおり、さいきん、大内力教授および日高晋教授によって、これまでの通説とは異なる特異な見解が発表されている。そこでこの小論では、この大内・日高両教授の特異な見解を紹介・検討するとともに、不十分ではあるが、この問題について小見を提示してみることにしたいと思うのである。

なお、とくに差額地代第一形態論を展開する場合に、いわゆる「耕作序列」をどのように位置づけるかという点に問題をしばったのは、これが(イ)地代理論の研究史の上で今日まで重要な問題になってきているばかりでなく、(ロ)のちにもふれるように、差額地代第一形態論、総じて地代論を展開する場合の方法論

(1) 周知のとおり、収穫低減法則と地代法則とを直接結びつけて理解しているリカードの主張 (David Ricardo, *The Principles of Political Economy and Taxation*, Everyman's Library, P33以下) に対して、マルクスは実証的、理論的に反論を加えているが、このことが地代論の研究史の上で重要な意味をもつものであることはいうまでもない。実証的反論については、1641年から1851年までの小麦の平均価格の分析によって果されている (Marx, *Theorien über Den Mehrwert*, Teil 2, Dietz Verlag Berlin, S 123—S 125)。リカードウ理論に対しては、ほかに、ロドベルトスの反論もある (ロドベルトス「地代論」岩波文庫版)。

なお、リカードウ理論については、その後もしばしばむしかえされているといわれる (レーニン「農業における資本主義他八篇」国民文庫版・152頁以下)。

の理解の仕方にまでかかわってくる問題である、と考えたからである。

II. 大内・日高両教授の見解

そこでまず、この大内・日高両教授の特異な見解を紹介することにするが、論点を明確にするという意味で、便宜上その前に、必要な限りで、これまでいわゆる通説とされてきているマルクス自身の考え方を、「資本論」の叙述にできるだけ忠実に紹介しておくことにしたい。

1. マルクス自身の見解

マルクス自身の考え方は、一口にいうならば、差額地代第一形態なるものが、リカードウらの主張するように、優等地より劣等地に順次耕作が進行してゆくいわゆる「下向序列」だけにしぼって成り立つとすべきではなく、劣等地より優等地に耕作が進行してゆくいわゆる「上向序列」や、更に、耕作が優等地より劣等地へ、劣等地より優等地へと交錯して進行するいわゆる「交錯序列」のもとにおいても、成り立つものであるというところにある。この点について、マルクスは「資本論」において次のようにのべている。⁽²⁾

「A, B, C, Dなる四種の土地を想定せよ。更に小麦1クォーターの価格を三磅すなわち60志と想定せよ。地代は単なる差額地代であるから、この1クォーター当り60志という価格は、最劣等地については、生産費用に等しい。⁽³⁾すなわち資本プラス平均利潤に等しい。

Aがこの最劣等地であって、50志の支出で1クォーター60志を挙げるものとしよう。したがって10志または20%の利潤である。

Bは同じ支出で2クォーター120志を挙げるものとする。これは70志の利潤または60志の超過利潤となるであろう。

Cは等額の支出で3クォーター=180志を挙げるものとする。総利潤=130志。

(2) Marx, Das Kapital, Buch III, Diez Verlag Berlin, S 655—S 666. (訳) 岩波文庫版 (11), 67—69頁。(なお、以下にそれぞれ, Das Kapital III, S—岩 (11), 一頁と略記する。)

(3) ここでマルクスは生産費用 (Produktionskosten) というようにいっているが、これは生産価格 (Produktionspreise) のことである。

超過利潤 = 120志。

Dは4クォーター = 240志 = 180志の超過利潤を挙げるものとする。

そこで次のような順序が得られるであろう。

表 I

土地 種類	生産物		資本 前貸	利潤		地代	
	クォーター	志		クォーター	志	クォーター	志
A	1	60	50	1/4	10	—	—
B	2	120	50	1 1/4	70	1	60
C	3	180	50	2 1/4	130	2	120
D	4	240	50	3 1/4	190	3	180
計	10	600				6	360

それぞれの地代は、Dでは190志マイナス10志、すなわちDとAとの〔利潤の〕差額、Cでは130志マイナス10志、すなわちCとAとの差額、Bでは70志マイナス10志、すなわちAとBとの差額であった。そしてB、C、Dの総地代は6クォーター = 360志で、DとA、CとA、BとAの各差額〔合計に等しい。〕

以上のように、差額地代第一形態の概念を与えたのちに、マルクスは、さき
にのべたように、この差額地代が「下向序列」だけでなしに、更に、「上向序
列」や「交錯序列」のもとにあっても成り立つものであることを展開している。
このあたりに関連したマルクスの叙述を、わたくしなりの理解にしたがってダ
イジェスト的に要約してみれば、およそ以下のようである。⁽⁴⁾

(a) 「下向序列」(D→A)の場合

最初、最優等地であるD地のみが耕作せられず、なわち、穀物に対する社会的
需要の量が4クォーターで、その市場価格が15シリングであったとする。そこ

(4) Das Kapital III, S 666—S 669・岩 (11), 69—74頁。

で更に穀物に対する社会的需要の量が増加して、価格が1クォーターあたり15シリングから1クォーターあたり60シリングに漸次騰貴していったものとしよう。この場合に、小麦価格が1クォーターについて、20シリング、30シリング、60シリングという具合につぎつぎに騰貴してゆくにつれて、順次、C、B、A地に農業資本の投下が行なわれるにいたるであろう（つまり、C、B、A地が順次借地資本家の資本投下によって耕作圏内にとり入れられることになってくるであろう）。かくして、それにつれて、D地にはそれぞれ20シリング、60シリング、180シリングの差額地代が形成されることになってくる。C、B地についても、同様の機構にしたがって差額地代第一形態が形成されることになる。

(b) 「上向序列」(A→D) の場合

一方、まず最初に最劣等地であるA地のみが耕作されており、つまり、穀物に対する社会的需要の量が1クォーターあたりについて60シリングであったものとする。そうして、穀物に対する社会的需要の量が増加して、価格が1クォーター=60シリング以上に騰貴するにいたったものとしよう。この場合に、需要の量の増加に見合うべき必要な追加供給の量(=2クォーター)が、丁度B地から得られることになったものとする⁽⁵⁾、穀物の市場価格は再び1クォーターあたりについて60シリングの水準にまで低下することになるであろう。かようにして、B地には60シリングの差額地代第一形態が形成されることになる。以下、C、D地についても、同じようにして差額地代の第一形態が成立することを明らかにすることができる。⁽⁶⁾

(5) このような想定は、恣意的なものにすぎないのではないかという指摘がある(日高晋「地代論研究」時潮社、58頁以下)。たしかにそれは、このような想定自体に必然性はないのだから、恣意的であるといえないことはない。しかし、小見によれば、ここでの直接の問題は、「上向序列」のもので、しかも価格変動なしに差額地代が実現され得る条件がいったい何であるかということにあるものと考えられる。最初まず1クォーターの価格が60シリング以上に騰貴したが、必要な供給量2クォーターがB地によって与えられたので、価格は再び60シリングに低下したという場合に、B地の供給量が2クォーターでなければならないということはない。この場合に、穀物価格不変のもとで、いわゆる「上向序列」のもので、差額地代の一般法則が実現され得る一つの条件が論ざられているのである。

(6) この点についてマルクスは、更に、「この場合には、最初はAにより、次にはAとBとによって充たされた需要以上への需要の増大が惹起したことは、B、C、Dが順次に

(c) 「交錯序列」(A⇄D) の場合

さきに掲示した地代表 (表 I) において、穀物に対する社会的需要の量は10クオーターであると仮定されていたのであるが、これが何らかの事情によって17クオーターに増大したものとしよう。更に、これまで最劣等地であったA地が、他の60シリングの資本投下によって1½クオーターを生産し得る土地A'地によって駆逐され、あるいは、これまで最劣等地であったA地が長期にわたる継続的な合理的耕作の結果改良されることなどによって、A'地と同等の豊度を有するにいたったものとしよう。また、土地種類B, C, D地は、それぞれ、これまでと同じ豊度であるが、A地とB地との中間の豊度を有するA地、および、B地とC地との中間の豊度を有するB'地とB''地とが耕作せられるにいたったものとしよう。A地の穀物の個別的生産価格は、60シリングで1½クオーターを生産し、したがって、1クオーターあたり45シリングである。この場合に、まず、従来豊度の最も高かったD地やC地に比すれば相対的に豊度のより低い土地への耕作の進行がみられたということになるであろう。一方、絶対的に豊度のより高い土地に向って耕作は進まなかったであろうが、しかし、これまでの最劣等地A地またはB地に比すれば相対的に豊度のより高い土地に向

表 II

土地種類	生産物		投下資本	利潤		地代		1クオーターの生産価格
	クオーター	志		クオーター	志	クオーター	志	
A	1½	60	50	⅔%	10	—	—	45
A'	1½	75	50	⅕%	25	⅓	15	36
B	2	90	50	⅔%	40	⅔%	30	30
B'	2½	105	50	1%	55	1	45	22⅔
B''	2⅔%	120	50	1⅕%	70	1½	60	22½
C	3	135	50	1⅔%	85	1⅔%	75	20
D	4	180	50	2⅔%	130	2⅔%	120	15
計	17					7⅔%	345	

耕作され得たということではなく、一般に耕作可能化の耕作が拡大され、そして豊度のより高い諸地所が偶然後に初めてその範囲に入ったということであろう」とのべている (Das Kapital III, S 667・岩 (11), 70—71頁)。

て耕作が進んだことになるであろう。

この場合、さきの表Iの地代表は、上の表IIのように変更されることになる。ここでは、だから、優等地から劣等地への耕作の進行と、劣等地から優等地への耕作の進行とが交錯して出現したことになるのである。

かくしてマルクスは、これまでのにのべた諸点を総括しつつ、次のようにのべる。「一の差額地代及び一の等級別差額地代が現に存在するということは、下降的順序において優等地から劣等地への進行によっても、逆に劣等地から優等地への進行によっても、或いは両方向の種々の交錯によっても、生じ得る。(順序Iは、DからAへの進行によっても、AからDへの進行によっても形成され得る。)⁽⁷⁾」あるいはまた、次のようにもいう。「かくして、ウエスト、マルサス、リカードにおいてなお行われているような、差額地代に関する第一の間違った前提、すなわち、差額地代は、ますますヨリ劣悪な土地への進行または農業の絶えず減少する豊度を必然的に前提するということは、解消する。差額地代は、我々が見たように、ますますヨリ優良な土地への進行において生じ得る。それは、以前のヨリ劣悪な土地に代ってヨリ優良な土地が最下位を占める場合に、生じ得る。それは、農業における一層の進歩と結合されてあり得る。」⁽⁸⁾

2 大内・日高両教授の見解⁽⁹⁾

大内教授は、「剰余価値学説史」と「資本論」におけるマルクスの対リカードウ批判の箇所を紹介されたあと、次のようにいわれる。すなわち、マルクスは「歴史的な事実の問題と抽象的な原理の問題とにわけて議論をしているが、このいずれについてみても、差額地代が下向序列を基礎としなければならないというのはあやまりであり、いずれの方向に耕作がすすむと考えるもさしつかえない」⁽¹⁰⁾としている。しかし、「歴史的な問題として考えればまさにそのとおりであ

(7) Das Kapital III, S 671・岩(11), 79頁。

(8) Das Kapital III, S 672・岩(11), 80—81頁。

(9) 大内・日高両教授は、差額地代第二形態についても、収穫低減法則のみに限定して理論を展開すべきであるといわれているが、ここではとくに第一形態論に限ってその見解を紹介することにした。

大内力「地代と土地所有」東京大学出版会, 60頁。

るとしても、抽象的・理論的な問題として差額地代を考えるばあいに、はたしてマルクスがしたように、上向序列でも下向序列でも、ないしは収穫逓増でも逓減でも、地代の成立には変りはないといってしまういいものかどうかは大いに疑問である。むしろ歴史的事実はどうあろうとも、理論的には下向序列と収穫逓減を前提として、はじめて差額地代の成立を説明することができるといったほうが、正当であろう。⁽¹¹⁾このようにのべられたあと、教授は、次のようにこの点についての教授自身の論拠を示される。

「すなわちいまAだけが耕作されている状態から出発して、Bがくわわったとしよう。そうすればB地には60シリングの地代が生ずるであろうが、それはじつはB地がちょうど2クオーターを生産しうだけの面積しか存在しないことを前提としてはじめていいうることなのである。なぜならこのばあい穀物にたいする社会的需要は3クオーターと仮定されているのだから、もしB地が1エーカーではなく2エーカー以上存在しているとすれば、とうぜんA地は耕作圏外におしだされてしまい、穀物価格はクオーターあたり30シリングに低下して、地代は消滅してしまうからである。同じことはCが耕作圏にはいってくるばあいについてもいいうることである。ここでは穀物の社会的需要は6クオーターであるから、C地はやはり1エーカーにかぎられなければならないであろう。もしC地が2エーカー以上あれば、穀物価格は20シリングになり、A、B地は耕作圏外にでてしまう。そして地代はやはり成り立たないのである。こういうわけで、上向序列のもとでも地代の成立が可能だというのは、じつは優等地がつねに、穀物の社会的需要にたいする関係においては、相対的に僅少量においてしか与えられないということを前提としているのであり、もしこのような前提がなければ、地代はそもそも成立しないということになるであろう。」⁽¹²⁾

しかるに一方、教授によれば、下向序列のもとで考えた場合には、かかる「暗

(11) 同上書、63--64頁。

(12) 同上書、64--65頁。

⁽¹³⁾ 黙の前提」は何ら必要ではなく、それはまた、差額地代の性質からして当然であるとする。「この点は下向序列で考えたばあいとは基本的に異なる点である。すなわち、下向序列で考えるならば、D地がまず耕作され、しかもDの供給量では社会的需要が満せなくなったときはじめてCが耕作圏内にはいつてくる。そのばあいC地の量は限定される必要はすこしもない。C地がきわめて大量に存在していたと考えても、Dには無条件に地代が生ずるのである。さらにB地、A地が耕作圏内にはいつてくるばあいについても、同じことがいえるであろう。だから、この表にかんするかぎり、限界地たるA地は量的には限定されていないのであり、A地がかりに無限にあるとしても、B以上の土地の地代には何らの変化も生じないのである。」⁽¹⁴⁾とて、「このような差が生ずるのは差額地代の性質から考えてとうぜんのことである。差額地代は、第一形態にかぎっていえば、土地の自然的条件に差があり、特定の相対的に優良な土地について特定の資本がこれを独占的に支配しうることを基礎にして成立する。このばあい、いうまでもなく特定の相対的に優良な土地を、特定の資本が独占的に支配しうるという条件は、じゅうぶん重要視されなければならない。たんに土地の自然的条件に差があるというだけでは、むろん差額地代は成立しえない。なぜならいかに差があろうとも、もし最優等地在じゅうぶん大量に存在するならば、その優等地だけが耕作され、したがって地代も、その基礎になる超過利潤も、およそありえないからである。したがって、およそ優等地は、その耕作によって、穀物の社会的需要を満すためにじゅうぶんなほどには存在せず、劣等地の耕作が不可避になっていること、そのことを基礎として、優等地を耕作する資本には経営の独占が成立していること、それこそが地代に転化すべき超過利潤を発生せしめる基本的な条件なのである。上向序列で考えたばあい、あとからくわる優等地が、かぎられた少量のものでなければ地代がおよそ成立しえなくなるというのも、このような差額地代成立のメカニズムを考えれば、きわめてとうぜんのことであろう。」⁽¹⁵⁾

(13) 同上書、64頁。

(14) 同上書、65頁。

(15) 同上書、65—66頁。

このようにして大内教授は、次のような特異な見解を導びき出されるのである。「このことがはっきりするならば、差額地代を抽象的・理論的に考えるばあいには、下向序列において考えるのがとうぜんだということのみもおのずから明らかになるであろう。というのは、すでに明らかにしたように、下向序列において考えるならば、われわれはいわば無条件的に地代の成立を論証することができる。けだし、豊穡な土地から豊穡でない土地への移行ということは、そのなかに、とうぜん豊穡な土地がすでに耕作されつくしており、したがってそこに資本の独占を成立せしめつつ、より豊穡でない土地へと耕作がすすんでいっていることを含蓄しているからである。だからここでは、耕境が動くたびに地代が発生し、増大してゆくことを無条件的に論証できることになるであろう。」⁽¹⁶⁾

次に、ひきつづいて、日高教授の見解を紹介することにしよう。

日高教授は、先にダイジェスト的に要約・紹介した「資本論」におけるマルクスの叙述を種々検討されたのち、マルクスがのべている上向序列には、実は次のような「三種」の偶然がひそんでいると指摘される。

「上向序列によって『資本論』の表一が成立する過程を立入って迫ってみよう。『過程がA地から始まったとすれば』というその始まりには、A地だけが耕作されていたはずである。そしてA地の生産物の個別的生産価格である60シリングが市場価格を調整していたのであり、需要が増大するとA地のすべてが耕作されても十分な供給を与えることができなくなって、市場価格は上昇を始める。『新しい耕地が耕作されなければならなくなるるとすぐに、まずクオーター当りの価格が60シリング以上に上昇した』のである。そしてA地より等級の一段低い土地をa地と名づけるならば、もしA地の追加投資⁽¹⁷⁾の生産性がa地の第一次投資のそれより高いとか、あるいはa地よりも等級の上の土地が発見されるとかいうのでなければ、当然a地が耕作にはいるであろう。ところがマルクスは『しかし必要な2クオーターの供給がB地から与えられたので』という。つま

(16) 同上書、66—67頁。

(17) ここで日高教授は、「追加投資」をもち出しているが、第一形態論の段階においてこれをもち出すのは疑問であろう。

り市場価格は60シリングより高くなりながら、しかも a 地が耕作にはいる前、ちょうどその時に A 地より等級の上の B 地が発見されたのであるらしい。普通なら優等な土地から先に耕作がおこなわれるであろうのに、B 地が発見されなかったため A 地が先に耕作され、そのあとで B 地が発見されたということ自身が一つの偶然であるのに、そればかりではなく、この偶然はただ A 地の耕作の後でありさえすればよいのでなしに、こまかいタイミングを必要とするというもう一つの偶然がつけ加わるのである。A 地の生産物では需要がみたしえないので市場価格が60シリング以上になりながら、しかもまだ a 地が耕作され始めず A 地の追加投資もおこなわれていない時のことだ。もちろんマルクスは a 地については何一つのべていない。ただ『まずクオーター当りの価格が 60 シリング以上に上昇した。しかし必要な 2 クオーターの供給が B 地から与えられたので』と軽くいうだけである。しかも必要とされる偶然はそればかりではないのだ。もし発見された B 地が十分広大であって、B 地の耕作だけで全体の需要がみたされてしまうほどのものとしたらどうなるであろうか。最劣等地である A 地の耕作は需要をみたすうえに不必要となり A 地の資本は引上げられて B 地に移るだろう。そして市場価格はクオーター当り 30 シリングという B 地での生産物の個別的生産価格によって調整される方向に向う。やがて B 地での供給で需要がみたされると 30 シリングが市場価格を調整し、A 地の経営はなりたたなくなる。／広くてはいけないのだが狭ければ狭いほどよいかというと、そうでもない。もし B 地が小さすぎて B 地の耕作だけでは需要の増大がまかなえないと『価格は再び 60 シリングに下がった』とはいえない。／だから発見される B 地は、広すぎても狭すぎてもいけない。／整理してみると、(一) A 地が耕作されたあとで B 地が発見されること。(二) その時期は A 地が余地なく耕作されつくし、それでも需要がみたされずに市場価格は 60 シリングより高くなっているにもかかわらず、a 地の耕作も A 地の追加投資もまだおこなわれないうちであること。(三) B 地は、市場価格 60 シリングからの需要増加分をピッタリみたしうるだけの供給量を提供する広さであること。偶然は三つあるのである。⁽¹⁸⁾』

⑱ 日高晋「地代論研究」時潮社、58—61頁。

以上のようにのべられたあと、教授は、かかる偶然は下向序列においては何ら必要でないといわれる。この点について、教授は次のようにいわれる。

「こうした偶然は、下向序列には必要でない。優等地と劣等地の両方が与えられていたら優等地の方が先に耕作されるのは当然である。そして需要が増大し、優等地のすべてが耕作されつくしても需要がみたしえなくなったとき、市場価格が高くなって劣等地の耕作が可能になる。需要の増大⁽¹⁹⁾という要因は必要だが、それさえあれば必然的にその結果が下向序列となる。」

ここで新たに教授は、「論理的序列」というものをもち出され、そうして、教授の見解の核心を次のように提示される。「マルクスの混同は、序列についての考察が核心に迫るのを防げたのである。つまりかれは差額地代に欠くことのできない論理的序列という考えにはついに至ることができなかつたのである。／地代の理解にとってぬきさしならないほど重要な論理的序列とは何か。／事実上の上向序列であるか下向序列であるかには関係なく、地代が成立するための根拠こそ、ここでいう論理的序列なのである。たとい事実上の上向序列によるうとも、優等地が耕作されるのは劣等地での供給が制限されているからではなくて、逆に劣等地が耕作されつづけるのは優等地での供給が制限されているからである。ここまでくれば地代は論理的序列としては下向序列によらなければならないことが明らかであろう。／事実上の序列は下向によるのでも上向によるのでも、どちらの場合も底を貫ぬく論理的序列は下向序列であった。底を貫ぬく論理的序列としては下向序列であるからこそ事実上の序列については、下向序列が必然的にムリなく展開できたのにたいして、上向序列はいくつかの偶然に恵まれなければならなかつたのである。」⁽²⁰⁾

3 要約と論点

以上、あらかじめ、通説としてのマルクスの考え方をのべ、そのあと、大内・日高両教授の特異な考え方を、できるだけその叙述に忠実に紹介した。その論

(19) 同上書、62—63頁。

(20) 同上書、66—67頁。

述は、きわめて明快であるので、とくにダイジェストする必要もないと思われるが、両教授のこの見解は、叙述の仕方やあるいは細部の点の違いはともあれ、ほぼ内容的には同じであるといってよい。そこで、この両教授の特異な見解を、きわめて図式的ではあるが簡単に要約してみれば、およそ次のようになるであろう。

すなわち、(1) マルクスの場合における事実としての「耕作序列」を「上向序列」と「下向序列」とにわけて比較検討してみた場合に、「上向序列」においてはいくつかの「暗黙の前提」なり「偶然」の設定を必要とするのであるが、「下向序列」については何らかかる前提や偶然を必要とせず、必然的に需要の増加さえあれば展開し得るものであること、(2) この事実としての「下向序列」が何らかかる前提や偶然を必要とせず、必然的に需要の増加さえあれば展開し得るものであるということは、実は差額地代の性質や差額地代における論理的序列からいって当然であること、(3) したがって、抽象的理論においてはせいぜい、「下向序列」のみに限定して差額地代第一形態を展開・論述すべきであって、マルクスのようにいわゆる単なる歴史的事実としての「耕作序列」、つまり「上向序列」や「交錯序列」は抽象的理論としての地代理論の対象とすべきではないこと、ということになるであろう。

ところで、以上のように紹介・要約した大内・日高両教授の見解については、マルクスの考え方と対比してみた場合に、とくに次の三つの論点を提出しなければならないように思われるのである。すなわちその第一点は、大内・日高両教授は、まず最初に、マルクスが「資本論」でのべている「耕作序列」なるものを、上向と下向とにわけて比較検討したと称せられているのであるが、実はそれはマルクスのいう意味での、また本来の「耕作序列」とは全く別箇のものではないかということであり、また、第二点は、大内・日高両教授の場合、マルクスのいう意味での「差額地代法則」、つまりその形成のメカニズムを、いわば時間的、動態的な姿にしいておきかえてとらえようとされているものではないかということであり、そうして最後に、総括的にいって、大内・日高両教授は、マルクスの地代理論を検討してみたところ、いわゆる単なる歴史的事実がそこ

にまぎれ込んでおり地代論展開にあっては抽象的法則のみに限定すべきであると主張されているが、この両教授の見解は、とくに方法論的な視角からして重要な問題を提起するものではないかということ、の三点である。

そこで、以下に、この三つの論点について、とくに以上に引用した大内・日高両教授の文章の内容に即して、ややくわしくのべてみることにしたい。

III. 検 討

1 第一の論点について

すなわち、大内・日高両教授は、まず最初に、マルクスが「資本論」でのべている「耕作序列」なるものを、「上向序列」と「下向序列」の場合にわけて比較検討したといわれているわけであるが、実はそれはマルクスが考えている、また本来的な意味での「耕作序列」とは全然別箇のものではないかということからみてゆくことにしよう。

マルクスによれば、いわゆる資本によって解消することのできない土地相互間の相対的な等級の差異は、資本から独立した二つの一般的な要因、すなわち、(A)地所の豊度 (Fruchtbarkeit) と(B)地所の位置 (Lage der Ländereien) とによって規定される。⁽²¹⁾ そうして、このうちとくに(A)地所の豊度のみに限っていえば、⁽²²⁾ それは、「土地の客観的屬性であるとはいえ、経済的には常に関係を、農業の所与の化学的及び機械的發展度に対する関係を含み、したがってこの發展度と共に変化する。」⁽²³⁾ すなわち、土地の豊度、したがってまた土地相互間の等級の相対的な差異は、農業生産部面における技術發展の進行につれて、時々刻々、変化しつつあるものであるといえる。たとえば、先のマルクスの説明では、土地の等級は、 $D > C > B > A$ としたのであるが、農業生産部面における技術發展の進行を前提とする限り、一定時間の経過ののちにはこの等級順序に変化が生じて、たとえば $A > B > C > D$ という姿をとることも十分にあり得るである

②1 Das Kapital III, S 663・岩 (11), 64頁。

②2 マルクスにならって、この小論では位置の問題を捨象した。

②3 Das Kapital III, S 664・岩 (11), 65頁。

う。

いうまでもなく、借地資本家が土地に資本を投下するという場合に、他の資本家一般と同じように、単に「平均利潤」(Durchschnittprofits)の獲得を目ざしてではなく、「超過利潤」(Surplusprofits)の獲得をめざして資本の投下が行なわれる。「平均利潤」は、いわばかかる「超過利潤」の獲得をめざして相互に激しく競争しつつある過程の結果として、あるいは事後的なものとして形成されるにすぎないものともいってもよい。いずれにしても、土地所有者から土地を賃借して借地資本家はその土地に資本を投下するというときに、それはもっぱら「超過利潤」の獲得を直接の目的(動機)としていることは間違いないところであろう。そして、借地資本家が「超過利潤」の獲得を目的(動機)とするという場合に、他の資本家一般——工業資本家等の——と同様に、それがもっぱら生産条件の改善、一般的には技術の発展を通して実現せられるものであるということも正しいであろう。だから、農業生産部面におけるたえまのない技術発展の進行は、きわめて現実的で、ノーマルな想定であり、必然的な傾向であるということになってくる。

ところで、農業生産部面における技術発展の進行については、一般に、(a)灌漑排水や施肥などのように、直接土地改良に作用を及ぼして土地の豊度を高めるような種類のもの、(b)農用機械や農用建物などのように、直接土地改良に作用を及ぼすことのないような種類のもの、の二つに大別することができる。⁽²⁴⁾そこで借地資本家が土地に資本を投下する場合に、その不変資本部分は、必然的にこの二つの部分に適当な割合で分割され、投下されることになる。いま、便宜上、すべての借地資本家が、1エーカーについて等量の資本(たとえば50シリングづつ)を投下するものと仮定すれば、資本家相互間の「超過利潤」の獲得のための競争、したがってまた技術の発展をめぐる競争は、この農業生産部面における不変資本部分の分割割合を、各資本家ごとに異なったものたらしめるであろう。

かりに、ある土地が未耕地の状態では最劣等地であったとしても、その土地

24. 大島清「農業問題序説」時潮社、232頁以下。

に投下せられるべき不変資本部分の中で、とくに先の二つの分類のうち、(a)の土地の豊度を高めるごとき灌漑排水や施肥等の部分により多くを投下するものとすれば、この土地の豊度が高められ、したがって、土地相互間の相対的な等級の差異が変化することになってくるであろう。

あるいはまた、一回かぎりの投資しか前提としない差額地代第一形態においても、教年にもわたる継続的な耕作の結果、豊度に変化の生ずることもあり得る。マルクスは「継続的な合理的耕作の結果として改良され⁽²⁵⁾」という例をあげている。事実、マルクスは、「農業における改良が種々の土地種類に不均等に作用⁽²⁶⁾」する場合の一例として、次のような地代表を掲げている。もちろんこれは、「最良の土地種類なるC及びDに対しては、A及びBに対してよりもヨリ多く作用する⁽²⁸⁾」ことが想定されているわけであるが、このことはまた、反対に、A及びB地などの劣等地により多く作用する可能性を含んでいるものといつてよい。マルクスは、「反対の場合も起り得る」とのべて、この可能性を示唆しているのである。⁽²⁹⁾

表 III

土地 種類	生産物		投下 資本	1クオー ターの生 産価格	利 潤		地 代	
	クオー ター	志			クオー ター	志	クオー ター	志
A	2	60	50	30	1/8	10	0	0
B	4	120	50	15	2 1/8	70	2	60
C	7	210	50	8 1/4	5 1/8	160	5	150
D	10	300	50	6	8 1/8	250	8	240
計	23						15	450

このようにみてくれば、現実には、土地相互間の相対的な豊度の差異は、「超過利潤」の獲得をめざす農業生産部面における技術発展の進行につれて、たえず変化しつつあるものといつてよいであろう。そうして、先にのべたように、

(25) Das Kapital III, S 668・岩(11), 72頁。

(26) Das Kapital III, S 669・岩(11), 76頁。

(27) Das Kapitel III, S 669・岩(11), 75頁。

(28) Das Kapitel III, S 669・岩(11), 76頁。

(29) Das Kapital III, S 669・岩(11), 76頁。

D>C>B>Aであった土地の等級順序が、A>B>C>Dという順序になり得るとことは十分にあり得るものとみてよいであろう。

このように、農業生産部面における技術発展の進行につれて、土地相互間の相対的な等級の差異が変化し得るということになってくれば、種々の土地種類が耕作せられる順序は種々であり得ることとなる。「いろいろな土地種の耕作の順序さえもそれによって変化し得る⁽³⁰⁾」ことになる。つまり、種々の等級地のいずれが最初に借地資本家によって耕作されることになるか、いかなる順序でいかなる等級の土地に農業資本が投下されることになるかは、現実にはまったくの偶然事にすぎないことになってくるのである。いま、さきに定義したように、「耕作序列」について、優等地より劣等地に耕作がすすんでゆく場合を「下向序列」、劣等地より優等地に耕作がすすんでゆく場合を「上向序列」、この両者が交錯してあらわれる場合を「交錯序列」とそれぞれよぶならば、そのうちのどの「耕作序列」が現実に実現されることになるかはまったくの偶然事にすぎない。たとえば、「下向序列」しか現実にはあらわれ得ないということは、決していい得ないことである。だから「下向序列」をとってみても、何らかの前提条件を設定しない限り、すなわち、何らかの「暗黙の前提」なり「偶然」を設定しない限り、それは自動的に必然的に展開し得ることにはなっていないのである。

たとえば、先にマルクスから引用した「下向序列」を例にとってみよう。最初D地のみが耕作せられ、すなわち、穀物に対する社会的需要の量が4クォーターで、その市場価格が15シリングであったとして、次にその需要が増加して価格が1クォーター=15シリングから1クォーター=20シリングに騰貴したものとしても、直ちにC地が耕作せられるとするわけにはゆかない。農業生産部面における技術発展による土地豊度の増進を前提とする限り、(イ)D地よりもより優等な等級地D'地が耕作の圏内に入ることないこと、(ロ)耕作の圏内に入ってくるC地の穀物供給の量は土地改良等による豊度の増進にもかかわらず、1エーカーについて3クォーター以下でも以上でもないこと、(ハ)C地が耕作圏内に

(30) Das Kapital III, S 664・岩 (11), 65頁。

入ってくるのは、D地よりもより優等なD'地に資本が投下されるよりも前であればならず、更に、B地に資本が投ぜられる前であればならないこと、などの「暗黙の前提」なり「偶然」を仮定しなければならないであろう。しかも、このような仮定は、更に、C地からB地に、B地からA地に耕作がすすんでゆく各段階においてその都度必要となってくる。以上要するに、現実には「下向序列」にしても、何ら自動的、必然的に展開し得ることにはなっていないと思われるのである。

むしろ、「耕作序列」は現実には一方的に「下向序列」のみを展開するわけではなく、たえずそれ自体に「上向序列」に移行し得る契機を含んでいるのであり、また同じように、「上向序列」も「下向序列」への移行の可能性をもっているものといつてよい。この意味では、いわゆる「交錯序列」というものももっとも現実に近い「耕作序列」であるといつても過言ではないであろう。事実、マルクス自身、「順序II(交錯序列のこと——漆原注)は兩種の運動を包括する⁽³¹⁾」(傍点は漆原)とのべて、この点を示唆しているのである。

したがって、「上向序列」が大内・日高両教授の指摘されているように偶然的なものであるとすれば、「下向序列」もまた同じように偶然的な性質のものであることになるであろう。「下向序列」や「上向序列」や「交錯序列」は、偶然で種々の形をとり得るいわゆる現実の「耕作序列」が、便宜上、いわばその主要な形態に着目して分類されたものにほかならないといえるであろう。そうして、マルクスが「資本論」において叙述している「耕作序列」、マルクスのいう意味での、本来の「耕作序列」は実はこのような性質をもつものであると考えられるのである。

このようにみえてくるならば、大内・日高両教授が、マルクス「資本論」における「耕作序列」を比較検討してみたところ、「下向序列」は穀物に対する社会的需要の量の増加につれて必然的なものとして展開し得るが、「上向序列」は「暗黙の前提」なり「偶然」を仮定しなければならないといわれる場合に、かなり、

(31) Das Kapital III, S 671・岩(11), 79頁。

これまでみてきた「耕作序列」の概念とはくい違っていることに気づくであろう。すなわち、両教授はマルクスのいう意味での「耕作序列」をとりあげ、「上向序列」と「下向序列」とを比較検討したと称せられているのであるが、実はマルクスのいう意味での、本来の「耕作序列」とは全然異なったものを考えておられるのではないかと思われるのである。

結論的にいえば、大内・日高両教授は、終始、農業生産部面における技術発展の進行という現実的で、ノーマルな前提を捨象し、土地相互間の等級の相対的な差異が常に不変であるという場のもとで、「耕作序列」をとり扱っておられるのである。しかも、これまで未耕地であった土地に単に資本が投下されるこ

(2) のちにものべるように、差額地代論において農業生産部面における技術発展の進行をいかに解するかは、地代論展開の課題をどのようにみるかという基本的な問題につながってくるように思われる。それはともかくとして、大内・日高両教授は、かかる技術発展の進行を捨象されているわけである。まず大内教授については、第一形態論において何故それを捨象すべきであるのか、直接理由を示されていない。日高教授はこの点きわめて明快である。教授はいわれる。「地代論のあつかうべきものは、制限された自然力の利用にとまなう剰余価値分配の特殊な形態の論理である。そして当然地代論であつかう各資本の技術内容は同一であると考えるてはならないであろう。」(日高晋, 前掲書, 164頁)。「生産条件そのものは均等化できない。生産条件を均等化させることなしに、どうして利潤率を均等化できるのだろうか。実際には、資本の力で動かせる生産条件のちがいと、動かさにくい生産条件のちがいとが重なって、利潤率のちがいの原因となっているであろう。だがここで大切なことは、資本の力で動かせる生産条件の方がすべて均等化しているとしても、しかもなお利潤率のちがいが残らざるをえないということである。それが問題なのであるから、ここでは資本の力で動かせる生産条件のちがいはいっさい捨象されなければならない。農業論なりそのほかの具体的な産業論なのではなくて、原理論のこの段階としては、制限された自然力が原因となるような利潤率のちがいがだけ、解明されなければならないものなのである。利潤論では、利潤率の均等化が、資本の競争だけによって、資本にとっていわば内部的に可能になっていた。それは生産条件そのものが均等化できるものだったからである。だがここでは生産条件は均等化できない。それでもなお資本は利潤率を均等化しなければならないのだ。そのためには、利潤論で形成された一般的利潤率、制限された自然力を利用しない資本間で形成された一般的利潤率を、すでに与えられたものとして、それをこえる利潤部分を、資本の外部に押し出すという形で、資本にとっていわば外部的に処理せざるをえないのである。そしてここに、地代論の領域がある。」(同上書, 3-4頁)。たしかに、地代論以前の段階においては、資本によって自由にし得る生産条件の均等化によって平均利潤率が形成されるメカニズムが明らかにされ、地代論にいたってはじめて、制限された自然力の利用にとまなう剰余価値分配の特殊な形態がとり扱われることになっているといえてよい。しかし、このことから、直ちに、地代論からそれまでに展開せられてきた運動法則が排除されなければならないということにはなっていない。むしろ、次々と展開

とによっても土地相互間の等級の相対的な差異が変化しないという前提のもとに、「耕作序列」をとり扱っておられるのである。⁽³³⁾ そのような場合には、日高教授が、「優等地と劣等地の両方が与えられていたら優等地の方が先に耕作されるのは当然である」とのべておられるように、あるいは「上向序列」や「交錯序列」が展開されるということは原則としてあり得ず、「下向序列」だけが一応必然的なものとして展開されることになってくるかも知れない。穀物に対する社会的需要の量の増加＝穀物の市場価格の騰貴につれて、まず最優等地に資本が投下され、更に、より劣等な土地へと耕境が広がってゆくということになるかも知れない。だから、まず劣等地が耕作せられ、ついで優等な土地へと耕境が広がってゆくということは、両教授の指摘をまつまでもなく、より優等な土地が偶然に発見されたということをご想定しない限り、現実には自動的、必然的なものとして展開し得ないことになるかも知れない。この点は「交錯序列」についても同様であろう。

以上要するに、大内・日高両教授にあっては、マルクスのいう意味での本来の「耕作序列」を「上向序列」と「下向序列」とに分けて比較検討したといわ

してきた法則、概念あるいは範疇などに、新たな規定を与えることによって、それらをますます具体化してゆくというのが、本来の方法論ではないかと思われる。価値法則にしても、いわば地代論以前において展開されたものとして限定されるのではなく、むしろ、地代論の展開を通じてより具体的な法則としてとらえられることになるものといえてよい。農業生産部面における資本の運動法則にしても、一応地代論以前において明らかにされた資本の運動法則をより具体的なものとして展開するものであるといえる。以上要するに、これだけの教授の叙述からは、何故地代論から技術発展の進行を捨象しなければならぬのかは必ずしも納得的であるとはいえないであろう。

(33) 「農業生産部面における技術発展のうちでも、とくにたとえば灌漑排水のごとき土地改良等が土地の豊度の増進に大きな影響をもたらしてくるものといえる。しかし、必ずしもそれだけでなく、新しい農耕方法や機械の導入にしても、土地の豊度に影響を与える場合がある。「土壌の組成における人為的にもたらされた改良によっても、または農耕方法における単なる変化によっても、生じ得る。最後に同じ結果は、下層土までも耕作圏内に引き入れられて耕土に加えられるに至れば、下層土の状態が異なってきて、これによっていろいろの土地種の等級における変化が起ることからも、生じ得る。このことは、一部は新たな農耕方法（たとえば飼料作物の如き）の応用によって、一部は、下層土を表土にすることとか、或いは両方を混合することとか、或いは下層土を掘り下げることなどにそれを耕作するとかいう機械的手段によって、条件づけられている。」(Das Kapital III, S665・岩(11), 66頁)。

(34) 日高晋, 前掲書, 62頁。

れているが、それは最初から一方的に農業生産部面における技術発展が捨象され、また未耕地であろうと既耕地であろうと、土地相互間の等級の相対的な関係が終始不変であるという意味で、まさに両教授独自の「耕作序列」にほかならないということになってくるのである。⁽³⁵⁾

2. 第二の論点について

つまり、大内・日高両教授は、マルクスがいつている意味での「差額地代の一般法則」を、しいて時間的、動態的なものとしていいかえようとされているのにほかならないのではないか、あるいは別のいい方をすれば差額地代形成のメカニズムにおける論理上の前後関係を、しいて時間的な前後関係として等置されようとしているのではないかということである。そこでこの点について次にのべることにしたい。

さきにみたように、マルクスは、「耕作序列」なるものを地代論においてもち出しているわけであるが、それと併んでかれは、終始、いわゆる差額地代法則をそれとは全く別箇のものとしてもち出しているのである。たとえばかれは、「剰余価値学説史」の中で、「耕作序列」を一つの歴史的な問題 (eine historische Frage)、あるいは現実 (Wirklichkeit) の問題であるとよび、いわゆる差額地代の一般法則 (das allgemeine Gesetz) はそれとは別箇のものであると明言して、両者をさい然と区別しているのである。⁽³⁶⁾

この場合に、「差額地代の一般法則」がはたして何をさしているのかということ

(35) なお、日高教授は、「A、B両地のうち豊度はB地の方が優れているが、A地は位置の点で有利であるとしよう。両方の条件が重なって現われる結果、A地の生産物の個別的生産価格の方がB地のそれより低い。そして普通ならA地の方が先に耕作されるであろう。それを豊度だけでA地を劣等地、B地を優等地とし、劣等地が先で優等地が後であるから上向序列である、として上向序列の存在理由を説明するほど他愛ないことはあるまい。豊度と位置とを両方含めればこれは明らかに下向序列である」(日高晋、前掲書、54頁)とのべて、「下向序列」の必然性を強調されているようである。しかし、豊度自体が、農業生産部面における技術発展の進行によって変動しつつあるのであるから、たとえ位置も含めて土地の等級順序をつけたとしても、その等級の相対的な関係も変動することになってくる。それだけでは必ずしも「下向序列」の必然性を論証することはできないものと思われる。

(36) Marx, Theorien über den Mehrwert, Teil 2, S262, S266.

と自体は、直接マルクスによってはさし示されていない。しかしそれが「資本論」における次の叙述に相当するとみるのが一応正しい見方であろう。それは一口にいて、差額地代が形成せられるべき論理的メカニズムはいったい何か、どのような要因なり条件が与えられたならば差額地代が形成されることになるのであるかということである。この論理的メカニズムは、マルクスの「資本論」における叙述によれば、⁽⁸⁷⁾およそ次の三点に要約される。すなわち、(a)最優等な地所の広さが限られていること、及び、各等級地に資本が投下されなければならず、したがって、これらの土地は同量の資本を投下しても不等量の生産物をもたらすこと、(b)優等な地所の供給量だけでは穀物に対する社会的需要の量を充足することができず、最劣等地の個別的生産価格が当該生産物全部の市場価格(Marktpreis)を規制するものとならざるを得ないこと、(c)したがって、優等地には一特別な超過利潤が形成されることになり、これが、資本家相互の競争を介して、土地所有者(Grundeigentümer)に差額地代として支払われるにいたること、ということになる。この三つの要因ないし条件にもとづいて、はじめて、差額地代の形成を論理的に理解し、説明し、叙述し得ることになるのである。

ここで当面問題になってくるのは、とくに(a)の要因ないし条件と関連してである。みられる通り、マルクスにおいては、①優等地の制限性ということと、②優等地と劣等地の耕作の併存は、及び(und)という接続詞で結びつけられており、それ以上立ち入って、両者の論理上の前後関係はとくに問題とされていない。これは、とくにマルクスの場合、両要因の論理的な前後関係を問題にすることは、差額地代形成のメカニズムを理解する限りでは意味がないと考えられたからではないかと思われる。たしかに両者の要因がともに根本的な前提となつて、はじめて差額地代形成のメカニズムが明らかにされることになる。①優等条件の制限性という前提だけでは差額地代の形成をとくことはできない。しかし一方、②優等地と劣等地の併存が与えられただけでも、差額地代の形成を明らかにすることはできない。なぜなら、単に生産条件のうえて優等条件と劣

(87) Das Kapital III, S671, S759・岩(11), 79頁および235頁

等条件のちがいがあるというだけでは、せいぜい一般の超過利潤の形成を明らかにできるだけであって、とくに特別な超過利潤としての差額地代の発生をまでも明らかにすることはできないであろうからである。以上要するに、①優等地の制限性と、②優等地と劣等地の併存の両要因が、ともに重なり合ったときに、はじめて差額地代の発生をとくことが可能なのである。

しかし、一步すすんで、①優等地の制限性と②優等地と劣等地の併存（つまり劣等地の耕作の不可避性）のどちらが、論理的にいて理由をなしているかということになれば、①優等地の制限性がある、しかるのちに②優等地と劣等地の併存（＝劣等地耕作の不可避性）があるものとみななければならないであろう。つまり、両要因の間の論理的な前後関係としては、①の要因が理由となつて、その結果、②の要因ができていくとみななければならないと思われるのである。優等地と劣等地の両方が耕作されている場合に、そのどちらが先に耕作せられることになったかは、先にのべたように、理論的に確定することはできない。優等地が耕作せられていて、そのあとに劣等地が入ってきたとも考えられるし、また、劣等地が耕作されている状態において優等地がとり込まれたとも考えられる。現実の「耕作序列」、つまり時間的な前後関係としては、さきにものべたように種々の場合が可能である。しかし、いま穀物に対する社会的需要の量が与えられているとした場合に、優等地の供給量だけではそれをみだし得ないが故に、劣等地の耕作が不可避になっているとみななければならない。そして劣等地の耕作が不可避であるが故に、劣等地の個別的生産価格が、この穀物全体の市場価格を規制することになってくるのである。だが、論理上の前後関係からいえば、①優等地の制限性→②優等地と劣等地の併存（＝劣等地耕作の不可避性）という因果関係が貫徹しているものといつてよいであろう。（のちにものべるように、ここでは、農業における技術水準は一定の段階にあるとされている。）⁽³⁸⁾

(38) 「差額地代は、土地の自然的豊度(ここではなお位置は考察外に置かれる)における、そのつどの所与の耕作発展度について与えられた差異から生ずる」(Das Kapital III, S671・岩 (11), 79頁)。

以上、まえおきのことを若干のべたのであるが、実はほかでもなく、大内・日高両教授自身、かかる論理上の前後関係をとくに強調されているからである。

大内教授は、マルクスの叙述における「上向序列」と「下向序列」とを比較検討されたのち、先に引用した通り、次のようにいわれている。

「このような差が生ずるのは差額地代の性質から考えてとうぜんのことである。差額地代は、第一形態にかぎっていえば、土地の自然的条件に差があり、特定の相対的に優良な土地について特定の資本がこれを独占的に支配しうることを基礎として成立する。このばあい、いうまでもなく特定の相対的に優良な土地を、特定の資本が独占的に支配しうるという条件は、じゅうぶん重要視されなければならない。たんに土地の自然的条件に差があるということだけでは、むろん差額地代は成立しえない。なぜならいかに差があろうとも、もし最優等地がじゅうぶん大量に存在するならば、その優等地だけが耕作され、したがって、およそ優等地は、その耕作によって、穀物の社会的需要を満すためにじゅうぶんなほどには存在せず、劣等地の耕作が不可避になっていること、そのことを基礎として、優等地を耕作する資本には経営の独占が成立していること、それこそが地代に転化すべき超過利潤を発生せしめる基本的な条件なのである。」⁽⁹⁹⁾

ここで大内教授は、「たんに土地の自然的条件に差があるということだけでは、むろん差額地代は成立しえない」といわれているが、この点については異論はないであろう。差額地代は、土地の②自然的条件に差があること（つまり、優等地と劣等地の併存）のほかに、①優等地の制限性のあることがつけ加わって、はじめて成立し得るのである。しかし、この②自然的条件の差と①優等地の制限性の論理上の前後関係をとくにいうとすれば、①優等地の制限性が理由となって、その結果劣等地の耕作が不可避になっていること、つまり②自然的条件の差が現実にてできていものといわなければならない。その点に関しては、大内教授の見解はたしかにマルクスの論述を一步深めたものといひ得

99) 大内力、前掲書、65—66頁。

るであろう。

この点について日高教授は、ほぼ同じような考え方を展開されている。教授はいわれる。「マルクスの混同は、序列についての考察が核心に迫るのを防げたのである。つまりかれは差額地代に欠くことのできない論理的序列という考えにはついに至ることができなかつたのである。／地代の理解にとってぬきさしならないほど重要な論理的序列とは何か。上向序列で考えるとき、B地が発見されて耕作圏に加わった場合、マルクスは『価格は再び60シリングに下がった』というが、もしB地が広大ならばA地の資本が引上げられて価格の下落は60シリングでとまらないであろうということは、既にのべた。60シリングまでしか下がらないのは、A地でなしに実は新しく発見されたB地がそれだけで需要をみたすほど広くはなくA地の耕作を必要とするからである。そこに地代成立の根拠がある。地代が成立するのは、A地でなしにB地に制限性があるからである。／たとい事実上の上向序列によろうとも、優等地が耕作されるのは劣等地での供給が制限されているからではなくて、逆に劣等地が耕作されつづけるのは優等地での供給が制限されているからである。⁽⁴⁰⁾

ここで日高教授は、「論理的序列」という言葉をもち出されているわけであるが、これがいまここで問題にしている論理上の前後関係を意味するものであることはいうまでもない。その点では大内教授と同様に、マルクスの見解を一步深めたという意味で、その理論上の意義は十分に評価しなければならないであろう。

なおまた、この点に関して日高教授は次のようにもいわれている。

「蒸気力工場と水力工場との間に多数少数という区別が必要ないことを強調した際両者の並存を説いたが、このことを平板に捉えると、差額地代の根拠として優劣両条件の並存しかみない通俗的な地代観に陥りがちである。確かに差額地代の成立には優劣並存が必要であるし、両者の生産物の個別的生産価格の差から差額地代が成立つのも事実である。けれどもその根本には、できたら優等条件だけで需要のすべてをみたしたいという社会の要求があることをみの

(40) 日高晋，前掲書，66—67頁。

がしてはならない。それができないのは優等条件が自然的に制限されているからである。だからやむをえず劣等条件まで利用されるのだ。この事態を表面からみると優劣並存となっている。そうみるのがまちがっているというのではない。ただそれが優等条件の自然的制限性の結果であることを注目しなければならない、というのである。落流と蒸気機関とどちらが先に利用され始めたかなどというのはどうでもよいのであり、どちらにしても同じことである。どちらが先でも、落流の利用によるより低い個別的生産価格をもった生産物だけでは需要をみたせないから、蒸気力によるより高い個別的生産価格をもった生産物が必要なのである。そしてその生産物の増減によって需要の増減に必ずやることができるために、その個別的生産価格が一般的生産価格となることができるのであって、こうして差額地代が成立するのである。このように地代成立を構造的に考えることをせず、たゞ優劣両条件の並存が差額地代の根拠だ、あるいは両条件の差が差額地代となるのだと捉えただけでは、地代の正しい理解は得られないであろう。それこそが、通俗的な地代観にはかならないのである。⁽⁴¹⁾

この教授の文章の内容は示唆的である。「確かに差額地代の成立には優劣並存が必要であるし、両者の生産物の個別的生産価格の差から差額地代が成立つのも事実である」という点をとり出してみれば、やはり、①優等地の制限性と②優等地と劣等地の併存がともに差額地代成立の根拠になっていることを認めておられるのである。つまり、いずれが欠けてもこの成立を明らかにし得ないことになっている。「そうみるのがまちがっているというのではない」という意味はそういうことを十分に認められてのことであろう。しかし、重要な点は後段の「ただそれが優等条件の自然的制限性の結果であることを注目しなければならない」という箇所をめぐってである。この点に関しては、マルクスの示した「差額地代の一般法則」、つまり差額地代形成の論理的メカニズムをより深めたという得であろう。大内教授と同じように、日高教授のこの分析は、この限りで、地代理論の研究の上で十分に評価されなければならないと考える。

(41) 日高晋，前掲書，27頁。

しかしながら、かりにこのような論理上の前後関係をつけることが理論上意味のあることであるとしても、ここに更に新らたな問題がおこってくる。というのは、大内・日高両教授にあっては、かかる論理の上での前後関係を、実は^①しいて時間的な前後関係によっておきかえようとされているのではないかということである。あるいはまた、極端ない方をすれば、両者を^②しいて同一視しようとしているのではないかということである。

この点は、先にも紹介したように、大内・日高両教授が、時間的、動態的なものである^③穀物に対する社会的需要の量が増加しつつあるという前提のもとで、差額地代形成のメカニズムを説明しようとしていることから明らかであろう。大内教授は次のようにいわれているが、これは、上記の点を端的に示しているものといってよいであろう。すなわち、大内教授は、先に引用したように、「下向序列において考えるならば、われわれはいわば無条件的に地代の成立を論証することができる。けだし、豊穡な土地から豊穡でない土地への移行ということは、そのなかに、とうぜん豊穡な土地がすでに耕作されつくしており、^④しむがってそこに資本の独占を成立せしめつつ、より豊穡でない土地へと耕作がすすんでいっていることを含蓄しているからである」とのべておられるが、これは、この点を端的に示しているといつてよい。つまり、①優等地の制限性→②優等地と劣等地の併存（＝劣等地耕作の不可避性）という論理上の因果関係が、^⑤穀物に対する社会的需要の量が増加しつつあるという場のもとで、優等地が耕作せられていてそのあとで劣等地が耕作されることになったという時間的な前後関係として考えられ、理解されているのである。事実、大内教授は、「下向序列」では「いわば無条件的に地代の成立を論証することができる」といわれているが、これはかかる論理上の因果関係を時間的前後関係と同一視されていることを明確に示しているといえよう。

この点については日高教授も同様である。教授は先にみたように「論理的序列」という言葉をもち出されている。そうして、この「論理的序列」はもとも「下向序列」の性質をもつものといわれているわけである。この場合に、「論

④ 大内力、前掲書、66頁。

理的序列」という言葉が、ここで問題にしている論理上の前後関係、論理上の因果関係を意味するものであることはいうまでもないであろう。そうしてまた、「下向序列」というものが、他の「上向序列」や「交錯序列」と同じように、本来穀物に対する社会的需要の量が増加し[・]つ[・]つ[・]あ[・]るということを前提としているものであることもいうまでもないであろう。つまり、「下向序列」というものは、もともと、時間的な前後関係、動態的な過程にあるとみてよいであろう。だから、「論理的序列」が「下向序列」の性質をもつということは、とりもなおさず、差額地代形成の論理的メカニズムを時間的な前後関係として表現し得る、あるいは同一視し得ると考えておられることを示しているといえるであろう。

事実、日高教授は、「論理的序列といっても、記述する場合は優等地が先に耕作され劣等地が後にくる、という形をとらざるをえない⁽⁴³⁾」とのべておられる。優等地が先に耕作され、[・]しか[・]る[・]の[・]ち[・]に、劣等地が後にくるという時間的な前後関係として、差額地代の形成は論証されなければならないと明言されているのである。もちろん日高教授は、この文章に引きつづいて、「表現されたかぎりではそれは事実上の序列としての下向序列のようにみえるかもしれないが、底を貫ぬく論理的序列、優等地が制限されているので劣等地も耕作されるのだという論理的な前後関係をのべようとするものにほかならない⁽⁴³⁾」といわれ、事実上の「下向序列」との区別を強調されているようでもある。しかしいずれにしても、論理上の前後関係、因果関係が、穀物に対する社会的需要の量の増加につれて、優等地が耕作されたのちに劣等地が耕作されるにいったという時間的な前後関係でいいあらし得ると考えておられることはたしかであろう。

ところで、「差額地代の一般法則」における論理上の前後関係、因果関係を、

(43) 日高晋, 前掲書, 67頁。なお、ここで教授は、「記述する場合は優等地が先に耕作され劣等地が後にくる、という形をとらざるをえない」といわれるのであるが、本文でものべてあるように、どうしてそうならざるを得ないのか必ずしも明らかではない。「優等地の供給量が需要に対して不足しているが故に、劣等地耕作が不可避になっている」ということで論理上の因果関係は十分理解し得るし、また論理的な因果関係は記述されている。この因果関係を、あえて、「優等地が耕作せられていて更に需要が増加したので劣等地が耕作せられるにいった」というように記述しなければならないのは何故であろうか。

穀物に対する社会的需要の量の増加という想定のもとでとらえることは、それだけとしてみれば、支障はないようにみえるかも知れない。

しかしながら、何故あえて、かかる論理上の前後関係、因果関係に、穀物に対する社会的需要の増加という要因をしいて導入しなければならないのであろうか。①優等地の制限性のために、②劣等地耕作の不可避性が導びき出される。そこで、この劣等地の個別的生産価格によって、穀物全体の市場価格が規制されざるを得ないことになり、このようにして、優等地には地代に転化すべき一特別な超過利潤が形成されることになる。この場合に、すでに優等地も劣等地も出つくしており、また、穀物に対する社会的需要の量がすでに増加しつづいて、一定の水準にあること、すなわち、需要と供給の量は一致しているという想定に立っても、このような論理の因果関係のすじ道は辿れるはずである。いまここに記述したことだけからも、その因果関係を十分に理解することができる。何故あえて、穀物に対する社会的需要の量が増加しつづきあり、また、優等地から劣等地に向って耕作が移行しつづきあるという状態のもとで、このような論理的な因果関係をいいあらわさなければならないのであろうか。日高教授は、先に引用したように、そういう「形をとらざるをえない」といわれるのであるが、どうしてとらざるをえないことになってくるのか、その論拠は明らかではない。

以上にのべてきたことをここで一応要約しておけば、大内・日高両教授の見解は、「差額地代の一般法則」、つまり差額地代形成の論理的メカニズムを、①優等地の制限性と②優等地と劣等地の併存(=劣等地耕作の不可避性)の論理的な前後関係、因果関係を把握するということによって、より一層深めたものといっただけで、他方では、それを時間的な前後関係として把握するという必然性がないという意味で、必ずしも納得的であるとはいえないであろう。(そうして実はのちにものべるように、このように論理の因果関係を時間的な前後関係として等置(同一視)するということに、大内・日高両教授がマルクス地代論の方法論に関して反論を提出される一論拠になっていると思われるのである。)

3 第三の論点について

最後に、以上のべたことの総括として、大内・日高両教授の所説について、とくに方法論的な視角から、ごく簡単に問題点の指摘をしておきたい。つまり、マルクスの地代論を検討してみたところ、いわゆる歴史的事実がその中にまぎれ込んでおり、地代論展開に際しては抽象的法則のみに限定すべきであると主張されるのであるが、この両教授の見解は、マルクスの方法論に関して重要な問題を提起することになるのではないか、という点にごく簡単ではあるがふれておくことにしよう。

この点についての大内・日高両教授の主張は、ある程度先にも紹介したのであるが、問題を明らかにするという意味で、次の論述をも引用しておきたい。

大内教授はいわれる。「けれども、そのような歴史的事実が、すぐ理論の前提として与えられていいものかどうかは問題であろう。抽象化された原理論のなかでも、むろん一方においては人口が増大し、農産物にたいする社会的需要が増加してゆくことは、とうぜんに前提されなければならない。また他方では、土地の自然的条件には差があり、一定の条件の土地には限度があるということも、いっばんに前提されているとみていいであろう。こうした前提をふまえて考えるときには、さきにもふれたように、優等地がまず限度につきあたり、ついでより優良でない土地に耕作がひろがってゆくという下向序列がとうぜん考えられることになるであろう。それならば、右のような前提だけでとうぜん考えられる過程であるし、また差額地代の成立はそれによって無条件的に論証できるのである。ところが、もし上向序列で考え、しかも地代の成立の必然性をとこうとすると、上述のように、われわれはつねに優等地と社会的需要との関係を規定しておかなければならない。とくにマルクスのように、上向序列を、たえず優等地へと耕境がひろがってゆくというふうに観念するならば、このような規定はいっそう重要になる。なぜならたえず優良な土地がつけくわってゆくにもかかわらず、優良でない土地が耕作圏内にとどまっているということは、無条件的にはいえないことであり、ただそのくわわるべき優等地に限定を附することによってのみ、いいうることにすぎないからである。こういうわ

けで、上向序列のなかで、差額地代の成立の必然性を論証するという事は、抽象的・原理的に規定された世界のなかでは困難なのであり、いわばより具体的な、歴史的に与えられた事実を密輸入しなければしえないことだといわなければならない。われわれが問題だというのはまさにその点なのである。⁽⁴⁴⁾

一方、日高教授は次のようにいわれている。「豊度と位置の異なった二つの土地についてその耕作の事実上の順序をみた場合、下向序列も上向序列もあるであろう。最も多くの場合は、既に資本主義以前から、いや遙かに遠い昔から二つとも耕作されていて、どちらが先に耕作されたか知るすべもない場合であろう。どちらが先かがわからなくても、地代の成立を理解するのに一向に困ることはないのである。耕作の時間的前後関係、事実上の序列をとりあつかうことは、地代論にとって何の意味もない。意味があるのは事実上の序列ではなしに論理的なそれである。どちらが先にはなしに、どちらが理由となってが明らかになれば、地代の機構を理解できるのである。そして、それは既に、差額地代の一般的概念によって与えられているはずなのだ。落流と蒸気機関とどちらが先に利用されるようになったかというセンサクは、この場合何の意味もない。大切なことは、落流の利用だけでは需要がみたしえないからこそ蒸気力が利用されるということなのであって、優等条件の自然的制限性という概念を理解したら、論理的序列としての下向序列がそのままてくるのである。リカードははっきり理解したわけでもあるまいが、事実上の序列を論理的序列に関連させて展開した。マルクスはそれを事実上の序列としてだけとったから不十分にみえるのは当然である。かれは事実上の序列をモウラしようとして、上向、下向、交錯、と並べた。同時というのをいれたらもっと完全になったにちがいない。上向、下向、同時、およびその三つの交錯もあるとしたら申し分なかったであろう。けれども事実上の序列をいくら考えてもでてくるのはたかだかそのくらいのことでしかない。どちらが先かという過去のセンサクは、当面の差額地代の解明には何の役にも立たない。マルクスには事実上の序列の背後にある論理的序列に迫っていくだけの基礎がなかった。優等条件の自然的制限性とい

(44) 大内力、前掲書、67—68頁。

う地代論の中心の柱が、第38章以来一貫して曖昧に濁らされていたのである。このことが序列の問題だけでなく全体にわたって、また第一形態論だけでなく第二形態論や絶対地代論にまで及ぶマルクスの地代論にとっての致命的な欠陥をひき起しているのである。⁽⁴⁵⁾

みられる通り、大内・日高両教授の主張はマルクス理論には、抽象的理論の展開のなかに歴史的事実がまぎれ込んでいるが、抽象的な地代理論の展開からはそれを排除しなければならないということにつきるのである。しかし、はたしてこのようなマルクスの論述の解釈は正当であろうか。むしろマルクスと対比した場合に、極端ないい方であるかも知れないが、大内・日高両教授こそこの混同をおかしておられるのではないかと思われるのである。

さきに見たように、マルクスにおいては、「耕作序列」と「差額地代の一般法則」とは明確に、さい然と区別されている。ここでそれをくり返していっておけば、「耕作序列」は歴史的事実の問題であり、そこでは穀物に対する社会的需要の量が増加しつつあり、また農業生産部面における技術発展がたえず進行しつつあり、他方ではそれにともなって種々の等級地が種々の順序をもって耕作の圏内にとり入れられつつある。一方、「差額地代の一般法則」は、いわば差額地代が形成せられるべき論理的なメカニズムを明らかにし、それを理解するものであるが、その内容は先にみたような三点に要約し得ることになってくる。このようなマルクスにおける歴史的事実と抽象的・理論的な法則性との区別は、かれの「資本論」および「剰余価値学説史」においては、すくなくとも、こと地代論に関する限り、終始明確に貫ぬかれていると考えられる。

以上の点を確認した上で、次に大内・日高両教授の見解の構成をマルクスの場合と対比してみよう。まず第一にいい得ることは、両教授の場合に、歴史的事実としての「耕作序列」から農業生産部面における技術発展の進行という、現実的で、ノーマルな条件が捨象されている。そうして、「下向序列」はあたかも論理的に必然的なものとして展開されることになるかのごとき、両教授独自

(45) 日高晋、前掲書、70-71頁。

の抽象的な「下向序列」を構成される。そうしてまたもう一方では、「差額地代の一般法則」、つまり差額地代形成の論理的なメカニズムに、穀物に対する社会的需要の量の増加という要素をしいて導入する。かくして、このような二つの操作を経て両者にそれぞれ類似性を与えたのちに、両者を直接に接合(=等置)されようとしておられるのではないかと思われるのである。あるいは両者は同一視されることになっているのではないかと思われるのである。しかも、このようにして接合(=等置)したものが、本来「抽象的な原理論」において論ぜられるべき法則、理論だといわれるのである。

このようにみえてくるならば、大内・日高両教授の見解は、マルクスの方法論に対して重要な問題を提起することになるものといわなければならないのではなからうか。極端ない方をすれば、大内・日高両教授こそ、歴史的事実と抽象的理論の混同、ある面における両者の同一視をおかされているといえないであろうか。⁽⁴⁶⁾もちろん、マルクスの地代論の場合、歴史的事実としての「耕作序列」が明らかにとり入れられているのであるから、たしかに、歴史的事実が理論の中にとり込まれているということはいえるかも知れない。しかし、小見によれば、これは両者をさい然と区別した上で、しかも両者の関連性を統一的に把握しようとしたものにはかならないと思うのである。「統一」と「混同」とは異なる。そこで、ここにのべた問題点をより明確にするという意味で、マルクス自身の差額地代第一形態論を、とくに方法論的な視角から整理してみなければならぬ。次に、この点に関して、不十分ではあるが、小見を提示してみることとしたい。

(46) 日高教授は、「リカードははっきり理解したわけでもあるまいが、事実上の序列を論理的序列に関連させて展開した」(日高晋, 前掲書, 70頁)といわれているが、ここで「関連」というのはいかなる意味であろうか。リカードの地代論については、更に掘り下げた検討をしなければならぬと思うのであるが、リカード自身、「差額地代の一般的法則」と「下向序列」とを混同していたといえないであろうか。この点は、「原理的な問題として地代を考えるばあいには、リカードの思考方法こそむしろ正しい考え方なのである」(大内力, 前掲書, 70頁)といわれる大内教授のリカード解釈についても同様である。

IV 小見—差額地代第一形態論における「耕作序列」の意義

もともと、マルクス経済学の一つの方法論は、ある与えられた表象なり現象を抽象化することによって、法則、概念あるいは範疇を導びき出し、今度は再び、それらの法則、概念あるいは範疇につきつぎに具体的な規定を与えることによってそれらを具体化し、もとの表象なり現象に立ち帰ってくるというところにある。⁽⁴⁷⁾このようにして、最初は感覚的にのみ把握せられていた対象＝主体は、思惟において概念として再生産されることになる。この二つの方法を統一的に駆使するということが、かれの方法論の中軸をなしているものともいってよい。「第一の仕方においては、完全な表象が蒸発されて抽象的な規定となり、第二のものにおいては、抽象的な諸規定から出発し思惟による具体的なものの再生産にいたる」⁽⁴⁸⁾のである。かかる方法論にあっては、したがって、法則、概念あるいは範疇をそれだけとして孤立的にとり扱うのではなく、常に生きた現実との接触、交流が強調される。それは、「資本論」の全体の体系を一貫してつらぬいて⁽⁴⁹⁾いるばかりでなく、その個々の問題の箇所——たとえば、「資本論」の「第一篇

(47) 見田石介「資本論の方法」弘文堂、3頁。

(48) マルクス「経済学批判への序説」(宮川実訳「経済学批判」青木書店、312頁)。

(49) 「われわれがあるあたえられた国を経済学的に観察するばあいには、われわれはその国の人口、その人口の諸階級への・都市、田舎、海洋への・種々な生産部門への・配分、輸出輸入、年々の生産と消費、商品価格などをもってはじめる。／實在的なもの具体的なものから、すなわち現実的な前提から、したがってたとえば経済学においては全社会的生産行為の基礎であり主体である人口から、はじめるのが、正しいことのように思われる。だがこの方法は、これをより立ち入って観察するときは、誤謬だということがわかる。人口は、たとえば、それを構成している諸階級を除外すれば、ひとつの抽象物である。これらの諸階級もまた、その基礎をなす諸要素、たとえば賃労働、資本などが知られていなければ、ひとつの空語である。さらに賃労働資本などは、交換、分業、価格などを前提する。たとえば資本は、賃労働、価値、貨幣、価格等々がなければ存在しない。そこでわれわれが人口をもってはじめるとすれば、それは全体にたいする一個の混沌たる表象であるだろう、そしてわれわれは、より精密な規定によって、分析的に、次第次第により簡単な概念に到達するだろう。表象された具体的なものからますます稀薄な抽象的なもの〔一般的なもの〕に進んでいき、ついにもっとも簡単な諸規定に到達するだろう。そこからいまやふたたび後方への旅がおこなわれ、ついにわれわれは、ふたたび人口に到達するだろう。しかし今度は、一個の全体の混沌たる表象としての人口ではなくて、多くの諸規定と諸関係とから成る一個の豊富な総体としての人口である だろ

商品と貨幣」同「第二篇 貨幣の資本への転化」など——においてもつらぬか
れているといつてよい。⁽⁵⁰⁾

したがってまた、いわゆる歴史的事実と抽象的理論との関係にしても、エン
ゲルスがのべているように⁽⁵¹⁾、両者は明確に区別された上で、統一的に把握され
ることになる。だから、マルクスの「資本論」においては、歴史的事実は、表
象、現象として理論の出発点なり対象＝主体になっているとともに、一方では、
理論の具体化の過程においてたえずそれへの回帰が試みられる。そのようにし
てはじめて、理論が十分に客観的、現実的に正当なものとして検証せられ、ま
たそれによって現実の過程を説明し得るものとしての理論の意義も明らかとな
ってくるのである。もちろん、このような二つの方法が、最初から混同されて
いるということになってくればそれは問題であるが、マルクスの場合、明確に
区別された上で両者の統一がはかれることになっていると思われる。

それならば、このような方法論は、地代理論、とくに当面の問題である差額
地代第一形態論ではどのようにつらぬかれているであろうか。まず第一の方法、

う。」(マルクス「経済学批判」青木書店、311頁以下)。「資本論」は資本主義的生産様
式のいわゆる細胞形態 (Elementarform) としてのいわゆる商品の研究をもってはじま
るのであるが、それがかかるマルクスの方法論を端的に示すものであることは周知のと
おりである。

(50) 冒頭の価値論の叙述にしても、具体的な商品交換の現象から出発して価値実体 (= 抽
象的人間労働) が導びき出され、更にかかる価値実体から出発して再び現象面の説明
に立ち帰ることになっており、この二つの叙述を通してはじめて、いわゆる価値法則なる
ものが全体として理解し得ることになっているといつてよい。具体的にいえば、完全に
成熟したものとしての諸商品の交換という表象せられたものから、いわゆる第一の方法
によって、それらに共通なものとしての価値実体 (= 抽象的人間労働) が導びき出され
る。そうして次には、かかる価値実体 (= 抽象的人間労働) なるものが、価値形態論な
らびに交換過程論を通して、具体的にいかなる実現の形態をとるか、具体的にいかなる
運動をなすかが展開される。言葉をかえていえば、一社会として全面的に商品化せられ
たという完成された結果から出発して導びき出された価値実体は、再び商品交換の種
々の段階において、いかに自己を貫徹するかが論ぜられるのであり、同時に諸商品の交
換がいかにして形成せられるかの過程がとり扱はれているものといつてよい (この点に
関しては、ローゼンベルグ「資本論註解 I」青木文庫、107頁を参照されたい。) なお、
「貨幣の資本への転化」の問題については、説明を省略したい。

(51) マルクス「経済学批判」青木文庫版、255頁以下に収録 (エンゲルス「マルクス経済
学批判」)。

つまり表象、現象に一定の抽象化をほどこすことによって、法則、概念あるいは範疇を導き出すという方法からみてゆくことにしたい。結論的にいえば、それは、いわゆる「耕作序列」が表象なり現象に照応・相当するということで果されているものといってよいであろう。

先にみたように、「耕作序列」なるものは、現実には種々の形態が種々に交錯してあらわれるものであり、また、そこでは農業生産部面における技術発展がたえずなされつつある。しかし、このような状態のもとでは、すなわち土地相互間の等級の相対的な関係がつねに変動し、また、つぎつぎに新しい耕作地が耕作圏にとり入れられつつあるという状態のもとでは、「差額地代の一般法則」を、つまり差額地代形成の論理的メカニズムをすぐに理解し叙述し得ることにはならない。それは、現実には混沌の世界であり、あるいはまた、時間的、動態的な過程にあるものといってよい。

それ故、このような表象であり現象である「耕作序列」から、いわゆる「差額地代の一般法則」を導き出すことは、一定の思惟による抽象化の操作によってのみ果される。そしてそのような一定の思惟による抽象化の操作というのは、(a)農業生産部面における技術発展の進行を捨象するということ、(b)かかる「耕作序列」がすでに完成していること、あるいは一定の時点(段階)において静態的なものとしてであると仮定すること；の二点である。第一の抽象化については、マルクス自身「土地種類の等級は、この発展段階に関連して計算されていることを前提する」といっていることから明らかである。また、現実には借地資本家ごとに種々の生産条件が異なっており、たとえば土地改良等の面への投資の度合も異なっているであろうが、それは、この段階では一応すべて捨象される。⁽⁵²⁾ いかえれば、土地条件の差以外の、資本によって自由に動かし得る生産条件は、すべての借地資本家について同一であるということが仮定され

52) 日高教授は次のようにいわれているが、これは「差額地代の一般法則」を明らかにする限りでは正しいといえる。しかし本文でものべておいたように、これはいわば地代論の反面にすぎないのであって、やがて「差額地代の一般法則」が明らかにされたのちには、再び技術発展の問題はとり込まれてくることになるのである。「差額地代第一形態論においては投資が相並んでおこなわれる途中で技術の改善がおこなわれるなどというこ

る。第二の抽象化については、先に引用したマルクスの叙述からわかるように、差額地代の説明において、すでにA、B、C、Dの各等級地がいかなる順序で耕作にとり入れられつつあるかという「耕作序列」のもとではなしに、そのすべてが出そろっている（別言すれば、すでに地代表は表Iのように完成されている）とされている点からして明らかであろう。

このようにしてはじめて、いわゆる「差額地代の一般法則」、つまりその形成の論理的メカニズムを、理解し、説明し、叙述することが可能となる。この「差額地代の一般法則」については、ある程度先にものべたので、ここでは省略する。⁽⁵³⁾

このように考えてくると、「耕作序列」と「差額地代の一般法則」が全く異なったものであることも明白であろう。また、穀物に対する社会的需要の量の増大、種々の等級地への耕作の移行という時間的、動態的な過程は、「耕作序列」において問題となることであり、「差額地代の一般法則」では積極的意味をもたないことも明らかであろう。それはまた、いわゆる「耕作序列」なるものと「差額地代の一般法則」との混同をさけるということからして当然であるといえよう。事実、先にふれたように、「差額地代の一般法則」を明らかにする場合に、前提として、いわゆる「耕作序列」が完成されているという想定がなされている。いかえれば、A、B、C、Dの各等級地がすべて出そろっているということが前提されている。優等地も劣等地も出つくしているという一定の完成された地代表が与えられた上で、いわば事後的に、かかる「差額地代の一般法則」が導びき出される。このことは更に、「耕作序列」をいわば静態的なものとして把

とは考えられなかった。そうしたことを考えるのはいたずらに論理を複雑にして混乱させるだけであるし、A地の資本とB地の資本が技術水準がちがっては、地代論としては困るのである。」(日高晋、前掲書、147頁)。

53) もっとも「資本論」では本来的農耕地代における「差額地代の一般的法則」の論述は、この箇所では直接与えられていない。これは、事実上、差額地代第二形態をも含めて差額地代一般(Differentialrente: Allgemeines)として、これに先だつ「第三十八章 差額地代。総論」ですでに論ぜられているためである。なお、「第三十八章 差額地代。総論」でも、落流と蒸気機関を例にあげているが、落流と蒸気機関の両方がすでに生産部に登場しているという前提に立って、その分析が行なわれているといつてよい。

握するものであるといってもよい。だから、穀物に対する社会的需要の量も増加しつつあるのではなくて、所与(さきの表Iでいえば、 $4+3+2+1=10$ クオーター)のものであるとされるのである。それだけとしてみれば、時間的、動態的なものとして「差額地代の一般法則」をとらえてもよいかの如くであるが、その必然性がないという点を先にのべた。しかし、それだけでなく更につきつめていえば、「耕作序列」との関係を上のように解する限り、それは、もともと、方法論的には現実に無意味で抽象的な想定だということになってくるであろう。

ところで、地代論展開の方法論上の意義は、むしろ第二の方法にあるといつてよい。すなわち、法則、概念あるいは範疇としての「差額地代の一般法則」なるものは、再び、種々の具体的な規定が附加され、具体的な諸条件を次々と導入されることによって、もとの表象なり現象に立ち帰るといふ関係にある。この方法なくしては、法則は単なる死語にすぎないだろう。というのは、かかる法則は、先にのべた二つの抽象化の操作によって、抽象的に把握されたものにほかならないからである。事実としては、「耕作序列」は一定の地代表として完成され、あるいは静止してあるものではなく、それは動態的にたえず形成し過程しつつあるものであり、また、農業生産部面における技術発展にしても、超過利潤の獲得をめざす個々の借地資本家によってつねにおしすすめられているものだからである。

それはいわば、かかる具体的な諸条件のもとにおける、この法則の実現化の種々の形態をとり扱うものであるといつてよい。また、かかる諸条件のもとの法則の有効性と妥当性を検証するものであるともいえよう。あるいはまた、一たん抽象的なものとしてとらえられた法則を、より具体的な法則として発展的に展開するものであるともいえるであろう。先に、マルクスの叙述をダイジェスト的に紹介したのであるが、そこにおいてみたように、かかる方法は、マルクスによって「耕作序列」が便宜上大きく「下向序列」、「上向序列」および「交錯序列」の三つに形態分類されることによって、果されているといつてよい。

ところで、以上のように差額地代第一形態論の展開において「耕作序列」を位置づけるということになってくれば、差額地代第一形態論、総じて地代論展開の意義はどのようになってくるであろうか。

さきに見た二つの方法のうち、第二の方法はとくに重要な意味をもつと考えられるのであるが、この方法は、別の見方をすれば、農業生産部面における技術発展の進行という、現実的で、ノーマルな条件のもとで、差額地代の運動を展開するものであるといえるであろう。事実、マルクスは、農業生産部面における技術発展の進行のもとで、いかに差額地代が実現され得るかの論証を企図していたのである。かれは、1851年にエンゲルスにあてて次のようにのべている。「要点は、地代法則を農業一般の豊度の増進に合致させることである。これによって一方では初めて歴史的諸事実が説明され得、他方では人だけではなく土地にも及ぶマルサスの劣悪化理論が排除される⁽⁵⁴⁾」と。この点を正しく把握してはじめて、たえず農耕地の豊度の劣悪化のもとでしか差額地代は成立し得ないとするいわゆるリカードウらの地代理論に対するマルクス批判の意義も正しく把握することができるものと考ええる。

しかもそれだけではない。以上のようにみえてくると、農業生産部面における技術発展(=資本)と地代(=土地所有)の関係、いかえれば後者による前者に対する圧力の問題は差額地代第二形態(Differentialrente II)論および絶対地代(Absoluterente)論において本格的に展開されることになっているのであるが、いわばそれを展開すべき契機なり見通しがすでに差額地代第一形態論に含まれているということになってくる。いかえれば、第二形態論なり絶対地代論を展開すべき根拠が、すでに出発点である第一形態論において与えられているといつてよいであろう。⁽⁵⁵⁾

54) マルクス・エンゲルス『資本論に関する手紙』上巻、岡崎次郎訳、法政大学出版局、25頁。

55) なお、日高教授は、「第一形態論では技術の改善という問題は捨象されていた。どういふ根拠であったかはとも角捨象されていたことだけはまちがいない」(日高晋、前掲書、147頁)といわれ、また、マルクスの差額地代第二形態論について、「ここに実は全く新しい事態、技術の改善が暗黙のうちに登場してきているからである」(同上)といわれ、マルクスが差額地代第一形態論において農業生産部面における技術発展の進行を捨象して

以上のように差額地代第一形態論、総じて地代論展開の意義を、資本と土地所有の対抗関係として把握するということは、地代論を理論的にのみならず実践的なものとして研究しなければならないという反省を改めてわれわれにうながすことになるといわなければならないであろう。そうしてまた、すくなくともマルクス自身の地代論展開の課題もそこにあったと思われるのである。

V 結 語

このようにみてくれば、先に紹介・検討した大内・日高両教授の特異な見解は、方法論的な視角からしてきわめて重要な問題を含んでいるといわなければならないであろう。たしかに、一見したところでは、両教授の論理の展開の形式には一点の破綻もないかの如くである。しかし、こと地代論に関する限り、「耕作序列」から農業生産部面における技術発展の進行を捨象して「下向序列」の必然性を導びき出すこと、「差額地代の一般法則」に本来「耕作序列」の属性としてのみ現実に意味をもつ穀物に対する社会的需要の量の増加という要素を導入するということ、そうしてまた、かくしてこの両者を等置(同一視)することが、いかに方法論的な視角からして疑問であるかが明らである。しかもそれだけでなく、問題は、マルクスのいう意味での、本来の「耕作序列」が単に歴史的事実の問題であるとして地代論の領域から排除されるということになってくれば、「資本論」の全体系およびその個々の叙述箇所——商品、資本、地代などの——を一貫しているマルクスの経済学方法論をいかに理解すべきかという点にまでつながってくるであろう。マルクスの方法論は、いうまでもなく「経済批

いたかのようにのべられている。しかしこれはいかなるマルクスの典拠によったものであるのか明らかではない。反対にマルクスは、最初から技術発展のもとの地代の研究を企図していたのである。かれは、「それは、農業における一層の進歩と結合されており得る」(Das Kapital III, S672・岩(11), 80—81頁)とのべている。あるいはまた、「すべての土地の絶対的豊度が上昇する場合に、ヨリ優良な土地種類の豊度がヨリ劣悪な土地種類のそれよりも相対的にヨリ多く上昇するならば、それと共にこの差額の大きさもまた増大する」(Das Kapital III, S672・岩(11), 80頁)ともいっている。そのほかにも、「資本論」の地代論の部分において、差額地代第一形態と農業生産部面における技術発展の関連をといっているのであって、日高教授の丸マルクス解釈は妥当でないように思われる。

判への序説」においてきわめて簡単であるが一応整理されている。このようなマルクスの方法論を大内・日高両教授はすべて誤まりであるともいわれるのであろうか——その場合にはその論拠を逐一提示されなければならないであろう。

もっとも大内教授は、教授の著書「地代と土地所有」の中で、ある程度この点に論及しておられる。「以上のように考えてくれば、差額地代論を原理論の範囲で論ずるかぎりでは、むしろリカアドウがそうしたように、収穫逓減（下向序列をも含めて）のうえでそれを展開することがぜひ必要な手づきであるように思われる。もちろんリカアドウが、それをどこまで意識的なものとして考えていたのかはわからない。さきにもふれたように、かれなりに抽象化された歴史的発展をばくぜんと考え、そのなかで常識的に収穫逓減を措定したにすぎないように思われる。その背後にかれのイデオロギー的な立場がかくされていたであろうことについては、さきにもふれたとおりである。ところで、もしリカアドウのように、収穫逓減を歴史的な傾向としてとらえ、いわんやそれを利潤率低下の傾向と結びつけようとするならば、それはたしかにあやまりであろう。マルクスの指摘をまつまでもなく、それがマルサスの人口論と同じようなあやまりをおかしたものであることは、むしろ自明のことといいいい。けれども原理的な問題として地代を考えるばあいには、リカアドウの思考方法こそむしろ正しい考え方なのである。⁽⁵⁶⁾「もっともこのような無用の瘤がまぎれこむ必然性はマルクスの『資本論』の論理の展開方法のなかに、そもそもあったというべきである。すなわちかれは、すでにまえにもみたように、いちおう歴史的なものと論理的なものを区別はしているのであるが、この両者の対応をあまりに強くみすぎる傾向が、この場合だけでなく、『資本論』全体をつうじて、あったといわなければならない。そのために、論理的に解明されなければならない問題がしばしば歴史的に与えられたものとして『資本論』の理論のなかにとりこまれてしまうということがおこるのであるが、それとともに、歴史的事実とし

(56) 大内力、前掲書、70頁。

て与えられたものを理論のなかにとりいれるばあいに、理論がゆるす範囲をこえて具体的なものとしていれてしまうあやまりもときにはみうけられるようである。このばあいはそのひとつの好例といえるであろう。だが理論の論理の厳密な展開のためには、そのような歴史的具体性の密輸入はじゅうぶん意識してさけられなければならない。⁽⁵⁷⁾ そうして大内教授は、このあと、このような密輸入の例として、商業資本や貸付資本の導入の仕方、土地所有の導入の仕方をあげ、更にいわゆる窮乏化法則をもあげておられる。

しかし、これだけの教授の叙述だけでは、教授の主張は必ずしも納得的であるとはいえないであろう。第一に、教授は歴史的事実とは別箇のものとして「原理論」なるものをもち出しているのであるが、いうところの「原理論」の範囲はどこからどこまでをいうのか。第二に、その「原理論」と歴史的事実との関連をどのようにみておられるのか。「いちおう歴史的なものと論理的なものを区別はしているのであるが、この両者の対応をあまりに強くみすぎる傾向が」マルクスの場合にはあったといわれているわけであるが、「あまりに強くみすぎる」というのはどういうことであろうか。逆にいえば、適当に両者の対応をみなければならぬというのであろうか。とすればその程度はどの線までをいうのか。——以上要するにこれだけの叙述からは、いかなる理由によってマルクスの方法論が誤まりであり、他方、教授自身の「原理論」の方法論が何であるかは必ずしも納得的ではないように思われるのである。

このように今後問題は、地代論、更に「資本論」の全体系を貫徹している方法論をどのように考えたいのかというきわめて大きな問題に関連してくることになるのではないかと思われる。それはまた、地代論に関していえば、その課題をいかにみるか、地代論展開の理論的、実践的な意義をいかにみるか、という問題にもつながってくるであろう。

以上、差額地代第一形態論におけるいわゆる「耕作序列」の理論的意義につ

(57) 大内力, 前掲書, 72—73頁。

いて、大内・日高両教授の特異な見解を紹介・検討し、あわせて、この問題に関する小見を不十分ながら提示した。とくに必要はないと思われるので、これまでこのべたことの要約は省略することにした。

なお、地代論の領域では、このほかにも種々の論点がある。たとえば、差額地代と市場価値法則との関連——とくにいわゆる「虚偽の社会的価値」(einen falschen sozialen Wert)⁽⁵⁸⁾の源泉問題など——は、そのうちでもとくに重要な論争点になっている。しかし差額地代第一形態論における「耕作序列」の意義については、大内・日高両教授をのぞけば、これまで余りほり下げた検討はなされていない。しかしながら、この問題は方法論上きわめて重要な意味をもつのではないかと考えたので、なお不備な点も多々あると思うのであるが、あえてこの小論においてとりあげることにした次第である。⁽⁵⁹⁾

58) Das Kapital III, S673・岩(11),82頁。

59) なお、白川清氏は、大内教授の見解に対する反論の形で、次のようにのべておられる。「教授の右のごとき見解は『マルクスから離れずかつマルクスを超えよう』とされていることの重要な一部をなしているにちがいない。けれどもかかるリカアドへの後退は、経済学をして歴史的な事実を説明しえないものにし、現実にある複雑きわまりない盲目的資本制生産社会の資本の運動法則を説明する仕方ではないように私は考える。／教授は上向序列で差額地代Ⅰが形成されることをあつかうには、優等地と社会的需要の関係をいちいち規定してゆかねばならない。つまりこの場合には、優等地が耕作に加わっても劣等な既耕地が耕作圏外に投げ出されない、という暗黙の前提が必要だといわれるが、これは当然で、『資本論』もまたそういう関係を規定しながらのべている。しかして大内教授はこのような暗黙の前提をしながら差額地代Ⅰの成立の必然性を論証することは、抽象化された原理論のなかでは困難だというのであるが、どうしてかかる仮定が抽象理論の展開にとって不都合であろうか。下向序列でD地に地代が生ずるという場合にも、社会的需要が増加したが既耕のD地のすべてが耕作されてしまったためC地を耕作にひき入れる、という暗黙の前提に立っているわけである。上向序列で未耕のD地がひき入れられても、C地の全部または一部を耕作せざるをえないということも、D地だけでは社会的需要を充しえないと前提するからである。抽象的理論としての差額地代論は、すでにのべたごとく地代の発生は如何にしてであるかだけでなく、資本が土地の上で運動するとき差額地代に転形へき超過利潤の形成されたり消滅したりする関係を説明するものである。この観点からすれば下向序列のみでなく、上向序列によって形成される超過利潤の形成をも説明しなければ一貫しないであろう」(白川清「価値法則と地代」御茶の水書房, 99—100頁)。この白川氏の見解については、マルクスの意味での「耕作序列」の意義を指摘され、その展開の必要性をのべておられるという点で正しいといえる。しかし、大内教授に対する反論としては、必ずしもその核心をついてはいないように考えられる。大内教授の「下向序列」の中味がマルクスの「差額地代の一般法則」にある意味でいしかえられたものであるということになれば、その限りでは大内教授の

所説に対する十分な反論となっていないように思われる。事実、日高教授は、かかる白川氏の反論に対して、「白川氏は、上向序列も下向序列も優等地だけでは需要がみたせないという暗黙の前提をおく点では同じではないか、という。しかし下向序列の場合、優等地で需要がみたせなくなつて劣等地にいくのであるから、この前提は少しも『暗黙』ではない。上向序列の場合は、新しく耕作にはいる土地がそれだけで需要がみたせないのであるから、前提の意味が違ふ。新しくはいる土地は、下向序列なら広さはどうでもよいが、上向序列なら制限されていなければならない、というのであつて、このちがいをどう考えるかが問題なのだ。」(日高晋、前提書、79頁)とのべておられるが、大内・日高両教授と白川氏の論点がズレているのではないかと思われる。白川氏が一方的にマルクスの「耕作序列」とその意義を主張されているのに対して、大内・日高両教授の「下向序列」はそれとは全く異なるものであるからである。本文でのべたように、大内・日高両教授のこの「下向序列」が内容的にみて何であり、また方法論的な視角からしていかなる性質のものであるかという前提をふまえない限り、両者の論点がかみ合わないのではないかと思うのである。

なお、関連して、白川氏は「抽象的理論としての差額地代論は、すでにのべたごとく、地代の発生は如何にしてであるかだけでなく、資本が土地の上で運動するとき差額地代に転形すべき超過利潤の形成されたり消滅したりする関係を説明するものである」といわれているが、地代論が「地代の発生は如何にしてであるか」を説明するものではないといわれる理由は何であるか。むしろ小見によれば、本文でのべたように、「地代の発生は如何にしてであるか」というその形成の論理的メカニズムとその実現化の過程の両者を統一的に把握するというのが、地代論の基本的な内容を構成するものではないかと考えられるのである。